

「京都の街の色」 シンポジウム余話

村上はるみ 「京都の街の色」シンポジウム組織委員会事務局長

錦秋あでやかな京都の街に、キョウノマチイロシンポの施風がかけぬけました。

景観指導行政に直接たずさわる京都市はもとより、各大学、研究機関、はたまた口のうるさい京雀、マスコミ、関連団体、企業などなどを巻き込んで、景観色彩を語る声が、このところ姦ましいことです。

2年前、このシンポジウムの企画段階でのことでした。「そんなもん、色だけではゼツタイに人なんて集まらへんで」というのが、大半の意見でした。新聞人にして「京都では特別に色色と声を大にして叫ばはらんでも、目立つ建物はいつのまにやら、自然に淘汰されて、町に馴染むようになってますわ。それが京都の不思議なところですよ」などと、反応がいまいち。

「京都にカラーマニュアルなどいらんのと違いますやろか」。「一口に街の色というたかて、季節、天候、一日の時間の具合によって違ってくるやろ、光の按配で見え方が変わって来ますがな、一概に言えるもんやあらしまへん」かような調子でつれないことおびたでしたのです。

ところが、近藤恒夫委員、秋田宗平委員、高木美智子委員、田中為章委員、豊原正智委員、渡辺康人委員ら色彩学会会員の強力メンバーたちにより、シンポジウムの核母体となる「景観色調査委員会」が結成されました。この研究会の特色は、文字通り色を取り持つ縁の景観専門家たちの集まりで、ジャンル、学会、大学などを問わず、京都の街の現状を懸念し、色彩が都市のデザインに強いファクターになりえることを、いちはやく、察知、認識した科学者、アーティストたちによって発進しました。サイエンスとアートの相互理解と協力によって生まれたユニークさあふれる研究部会でした。その内の一人で、さる高名な建築家などは、大学時代、色彩学の講義を受けていらいた色彩アレルギーのはずが、どうやら色の虜におなりの様子で、わたくしとしては、ほくそ笑んでいる今日このごろです。

「京都の街の色」 シンポジウムに思う

渡辺康人 (株)日本カラーテクノロジー研究所

11月9日は、私たちにとって記念すべき日でした。本格的準備に取りかかってからでも1年以上経過し、その集大成が9日のシンポジウムでした。盛会のうちに終了し、皆さんホッと一息ついているところです。これから報告書作りが控えていますので、まだ終わってわけではありません。私も組織委員として準備に参加させて頂き、微力ながらお手伝いできたことを嬉しく思っています。

準備に際して、秋田宗平先生、中村隆一先生、近藤恒夫先生、村上はるみさんを中心として、やっと軌道に乗ったのは、昨年10月ごろだったと思います。色彩学会会員だけでなく、京都に思いを寄せながら色々な分野で活躍されている方々が組織委員として集まりました。シンポジウムの基本目的は環境色彩の啓蒙ですが、京都で開催する意義やそれに伴う具体的な主題、手順などについて手探りの状態から議論が繰り返されました。開催規模、開催日や会場の決定、予算決定と集金方法、発表内容の決定、作業の役割分担の決定など、何度もミーティングを重ねるうちに具体化し、皆さんの表情に情熱があふれているのがわかります。講演者の依頼、プログラム印刷、協賛のお願い、レセプションの準備など、なかなか思惑通りに運ばず、思わぬ苦労をすることも何度かありました。しかし、その都度皆さま方の協力で、それぞれ大変ラッキーなかたちで処理でき、しかも、結果的に当初予定していた以上の好成果に導くことができました。多くの人が集り、その思いが一つになるときは、強大なパワーが生まれるということを実感でき、私にとって大変良い経験でした。

シンポジウムを聴講して下さった多くの一般の方々、これを機に改めて、環境色彩を身近なものとして捉え、目を向けてもらうきっかけになれば、大成功です。ともあれ、準備に係わった諸先生方はじめ委員の皆さま、まずはご苦労さまでした。